

# 京都文化について

林屋辰三郎

## 一 日本文化と地域文化

京都文化という言葉が、さまざまな意味内容を含みながら、何となく定着しつつある。しかし実体は必ずしも確実ではない。何となく理解されつつあるという内容について、わたくしなりに考えていることを述べてみたい。ことに昭和五十六年度から京都国立博物館のなかに、京都文化資料研究センターが設置されようとしている際でもあり、倉卒のうちに筆を執ることにした。

先ず、京都文化と云えば、歴史的には平安京奠都らいり明治維新に至るまで、日本の首都であった京都の文物として、日本文化を代表するいわば中央の文化であった。明治以後であっても京都にのこされた伝統は、京都文化を単なる地方文化と呼ぶことを許さなかった。しかし中央すなわち国家・貴族と云った片よった理解でもまた決してすまされないものがあった。京都の郷土と民衆が育て上げた地域文化といふべきものが存在したからである。その意味で京都には中央と地域のそれぞれの文化が共存しているのである。

これまで一般に、諸国の郷土の文化を地方文化とよぶことがならわしのようになっていた。そして歴史の方でも戦後には、郷土史を地方史とよびかえることが行われた。郷土という言葉がお国自慢のよういきこえ、郷土意識を強調しがちなのを恐れたからである。しかしその結果、地方史は却って中央を意識することを余儀なくされ、中央から自立しようとしても袋小路に入ったような形で、しだいに矮小化される結果になってしまった。従って地方史・地方文化という研究したい、もはや発展性を失いつつあると云えよう。わたくしはこれを打開するためには、もう一度、これを地域史・地域文化として位置づけることを提案したいと思う。そしてその場合の研究には、二つの眼(複眼)を必要とする。その一つの眼は、微視的に地域をほり下げて研究するのだが、もう一つの眼は、巨視的に、日本全体のなかでその地域を考えるのである。その場合にはもはや中央史や中央文化というものもなくなってしまう。たとえば、日本史は微視的には日本という地域をほりさげることが必要になる。地域史・地域文化の一地域として日本を考えることが必要になる。地域史・地域文化として国際的な理解が可能にもなる。

京都文化とは、このような日本文化に通じ京都という地域文化を究めるものとして設定しようとするのである。そして少し具体的に云うならば、戦国時代には京都を中央と考えて、京都という地域の特質を検討して、全国の領主の居住地に小京都が建設されようとした。京都が全国に拡散する現象が生れたのである。京都という地域文化が日本に広がり日本文化に通ずるという事実が、このように歴史のつくり上げられたのであった。その場合、京都の特質は、第一に山紫水明といわれるような自然的条件であって、東山あるいは比叡山、そして鴨川の景観が求められ、諸国の都市建設の基準と考えられたものである。第二は、商業的条件であって、市場や町がづくられ組織された町人が生産や販売にたずさわることが行われた。そして第三が、文化的条件である。多くの場合、東山文化とよばれた京都を中心とする生活文化が積極的にとりいれられ、襖絵や工芸品が創り出され茶・花・能といった芸能がさかんになった。そうした背景として信仰の上でも京都の祇園社などが迎えられ、祇園祭とそれにもなう山鉦や風流踊がうつされたものである。

このようにして京都文化は、分身を全国につくり、単なる中央でない日本文化として成長したのである。従って日本文化は、じつくと京都に研究の焦点を定めないかぎり、完全に理解することが出来ないであろう。日本文化の研究が京都から生れる所以である。わたくしたちはその研究の基礎を築くために、資料の収集、保存、調査、研究を積極的に進めなければならない。小京都は戦国時代ばかりではない。江戸もまた中ごろから江都と書き、ついで東都と称して、やがて明治とともに東京と称するようになった。それも京都を意識して東京と云うだけでなく、明治六年ごろから同十四年ごろま

で京都を西京と呼んでみたが、結局は京都はついに西京とはならなかった。京都はやはり京都であり、政治的地位は失っても文化的地位は守りつづけたのである。

## 二 京都文化の歴史的特徴

### A 渡来文化

平安奠都以前の山城盆地を開発したのは、五世紀に渡来して山城に定着せしめられた秦氏であった。彼らは京都盆地の西北、松尾・太秦のあたりに住居を定め、大堰川に大堰を建設し堤防を造成して、氾濫原であった盆地の農地化をすすめ、松尾社などを中心に発展しやがて広隆寺などの氏寺を建立した。その生業が農耕とともに機織であり、まさに殖産的氏族といふべきものであった。秦氏は盆地の東南にも定住して、深草屯倉を営み、稻荷社を中心に繁栄した。これについて盆地の東部、八坂郷には、高句麗からの渡来人が定住して八坂寺(法観寺)や八坂社(のちの祇園社)を営んで勢力をひろめていた。

このような京都盆地の渡来人の分布は、盆地北部を占居した大和葛城から移った賀茂氏、出雲地方を背景とした出雲氏などに比してはるかに強勢であり、積極的に賀茂氏などとも通婚して、盆地は全体として渡来人のふるさとのごとく風景を展開していたと思われる。そこで生み出されたものは、土木、才技、機織などの技術であり、社寺の創祀が示すような精神的な信仰であった。

やがて山城への新京の経営がはじまるとき、これらの渡来人はその身分的向上と政治的進出をはかるために、積極的に墾田を経営し、

これを京城として提供して、平安京建設の基礎をつくったことも周知のとおりである。その京中において彼らの技術は、鴨川の附替、堀川の運河化、さらに都城の建設など、また京中のなかに彼らの信仰は、そのまま大社名刺としてうけ伝えられることになったのである。これらは京都という地域がこれから体得する都市的性格の前提条件と云ってもよいであろう。

このような渡来文化の基底は、京都文化というべきもののなかに異国的なものに対する寛容性を醸成し、国際的な感覚を理解することにも役立つたにちがいない。平安時代初期には、漢風への憧憬がはげしくおこったのも、奠都以前の渡来文化と無関係ではあるまい。

## B 王朝文化

平安時代は、藤原氏を中心とした貴族文化の時代であった。しかしその内容を検討する時、それは単に貴族という階級の文化ではなく、京都の地域性を無視しては成立たないと云ってもよい。前代において渡来人から学んださまざまな才技の生産技術によって、京都人がはじめて貴族生活を装飾する文化財を生み出すことができたからである。その意味で平安時代という単なる時代の文化ではなく、平安京という王城に咲き、後世から文化の規範として羨望された王朝文化というべきものであった。

この王朝文化を考える時、王朝文学という言葉が耳慣れているように、文学を基本として、それを芸術化した作品が思い浮ぶのである。『古今和歌集』『源氏物語』という作品と、それを芸術化した四季絵、名所絵そして絵巻といった類である。これらの文学が主題としたのは、人間の哀歓とともに京都をめぐる山水の風景であった。

そしてこの自然的観想によって、さまざまな感覚的な意匠が生れた。京都国立博物館が昭和五十三年度特別展覧会のテーマとした「日本の意匠―工芸にみる古典文学の世界」は、この王朝文化の伝統と後世における継承のあとを、最も具体的に示すものであった。そこには文学作品の内容のシンボル化という困難な問題と感覚的な意匠化が同時に行われており、王朝文化の解明に好箇の資料を提供していると思う。

また王朝文化は、後世から憧憬の的となったが、当時としては最も現実的な内容をもっており、その意味でも都市的な文化様相を示すものであった。たとえば今様という当世風を標榜するものでもあった。今様への関心は、先例を尊重することとはうらはらな関係にあるが、都市の現実のなかに規範を求めて、それを肯定しようとした点でも、王朝文化はつねに復活する理由を持ち合わせていたように思われる。『梁塵秘抄』に収めた今様歌のスタイルは南北朝時代にも京童の口の端に上って二条河原の落書となり、さらに戦国時代に『閑吟集』の編集をも刺激したのであった。そしてやがて伝統文化として、ながい生命を保つのである。

## C 社寺文化

京都は、社寺の町である。古代の社寺は、おしなべて国家鎮護、王城守護を理想としてかかっていた。東寺、比叡山延暦寺は、その代表格であった。その後につづく仁和寺、醍醐寺、さらに四円寺、六勝寺と一括されるものは、いずれも御願寺とよばれる皇室関係の寺である。神仏習合の時代であるから、神社も寺院と同じである。それらから生み出された文化財は、仏像、仏画など仏教美術として環境的に独立したジャンルを構成しているのであるが、これらもま

た時代的には王朝文化のなかに位置することは否めないし、また明らかに社寺文化というべきもののなかに置かれていたのであろう。その意味で仏教美術と京都文化との間に、必ず融通するものがあると思われるし、仏教美術のうちには京都文化のうちに含みこまれるものが多いであろう。

しかし中世になると、国家よりも個人の救済のために、また王城よりも宗祖の聖のための寺院が急増してくる。とくに天台旧仏教のなかから浄土教が生れ、法然、親鸞やがて一遍がそれぞれ開宗し、禅宗が自立し、栄西、道元さらに夢窓が出るようになり、ついに日蓮が法華宗をひらいて、教線を京都に及ぼすころ、京都の社寺は全く一変する。

このように社寺の性格が多様になると、社寺文化にも変化がめだつようになる。寺院が宗祖個人の思想的遍歴のなかで生れ、信者個人の救済に手をさしのべるのであるから、寺院はそれぞれ独自性を主張し、個人の信仰的結合の中心に存在することになる。そして社寺が寄合を指導し、場を提供することも起ってくる。講とか座とかいわれるものである。これらは柿本人麻呂像や天神縁起を中心に柿本講という和歌の寄合、天神講という連歌の一座をもって結合しつつ同時に文字の修得、文化財の認識に役立つことにもなっていた。いわば教線の拡大が文化の普及にも役立つことにもなるのである。浄土教について云えば、迎摂会といい迎講とよばれた、聖衆来迎の行道劇などは、聖衆来迎の演技化ともいえる面白さも伴っていた。これらもまた、京都北野社に最も早く天神講がひらかれており、東山清水寺の五条橋、嵐山法輪寺の渡月橋などを舞台とした迎講が早く行われていたように、やはり京都の地域がそれらの由来するところ

らとなっていた。禅の文化に至っては、京都は五山の存するところであり、詩文絵画の上にも多くの文化財をとどめており、林下を代表する大徳寺は、茶道にゆかりふかい美術品や茶室庭園をのこしている。

当時の禅は、宗旨の相違に拘泥せず普遍的な教養として考えられたので、浄土と共通の地盤で庭園をつくり、法華信仰の町衆からも帰依されるところがあった。その点で社寺文化がそのまま町衆文化に接触する場合がある。

#### D 町衆文化

これは、中世末期の京都を中心に営まれた地域的小集団生活のなかから生れた文化である。この時期には全国に都市が成立したが、そこでも町衆は商・手工業者を中心とするものとして受けつがれている。

町衆と一口に云っても、その内容は多様であった。しかし都市の町衆たちが、農村の郷民らと同様の結合をもった目的は、その土地の自主・自衛であり、やがて自治へつながるためのものであった。かれらは古代の王城としての平安京の時代には、全く未組織で分散的な、「京童」と呼ばれる無頼の徒としてあつかわれていた。それだけに旧体制に対しては鋭い批判力をもった。さきにもふれた「二条河原落書」にもそのことがうかがわれる。しかし室町時代には(一)応永のころから、通りを挟んで両側のものが一つの町を結成し、互いに連繫するとあなどりがたい組織になっていた。そこに住む人々は「町人」とよばれ、商・手工業者を中心とするものであったが、(二)嘉吉の変のころから町が土一揆の攻撃にさらされるようになって、町の自衛のために土倉とよばれた高利貸業者と協力することになっ

た。応仁文明の乱の前後には、町衆文化の中核にしっかりと土倉が座を占めることになる。やがて乱が終り復興にさしかかるころ、(三) 明応より天文法華一揆を拠点として永禄十一年(一五六八)信長入京に至る時期には、町衆文化は経済力における土倉衆のみならず、文化的教養をもちながら没落してゆく公家衆をも、地域的連帯のなかにふくみこみながら発展した。それは町衆が最も完全な姿を現わした時である。

実は室町時代の文化を代表する東山文化も、この町衆を基礎としてはじめて成立つものであった。とくに嘉吉の変いらしい町衆の中核となった土倉は、現実に東山殿義政らの収入源であり、東山文化のいない手でもあったのである。従って町衆からは無縁のように見える東山文化の内容は、実は土倉を通じて町衆とつながっていた。東山時代の文化的創造は、表面は武家貴族的でも、所詮生活文化であった点で、町衆と共通するものであった。たとえば書院造りの構造も、個人の思索の場として経営された点では、上下貴賤に通うものがあったと思う。また募金を意味する勧進かんじんという文化創造の手段にしても、その発起人としての筆下しは准三后義政、従一位富子、征夷大将軍義尚などであっても、この募金行為に応ずるものは、ほとんど土倉や町衆であった。彼らは高額所得者の意味で有徳人とよばれたのである。

町衆の生態は、室町末期のころから製作されはじめた洛中洛外図屏風や、士女遊楽図屏風が、最も遺憾なく伝えるところで、王朝以来の諸行事も、応仁の乱後は町衆の手で復興され、まさしく京都の主人公となったおもむきがあった。

この人々の一部は、戦国乱離のなかに天下一統をめざして京都へ

の道をいそぐ英雄たちと結んで政治的豪商に発展した。そして折から諸国から産出した莫大な金銀を背景に、民・百姓に弥勒の出世を思わせるような黄金の時代を現出させるのである。

ここにおいて京都文化は、桃山の時代とともに町衆文化であるだけでなく、弥勒文化となり、天下人の文化となるのである。

#### E 伝統文化

日本の近世は、桃山時代において集約された中世的伝統をうけつぎ、昂揚された町人文化の成果を加えながら、爛熟した文化的発展をとげ、やがて近代への橋わたしをなすとげた。その点で近代さらに現代へうけつぐべき伝統の形成期であったと考えることができる。この時期には周知のように、政治的中心は江戸に移り、京都は「花の田舎」となったが、文化の花は依然として京都にあった。

この第一には、寛永期をあげることができよう。京都における上層町衆と、宮廷貴族の手によって王朝文化への回帰がさかんに行われ、王朝文学に取材した着想が光悦、宗達などの作品となり、また桂離宮などの構想ともなったりした。その点では東国を中心とした日光などの建築とは、きわめて対照的な文化を作りあげた。さらに曼殊院をはじめとする門跡寺院は、宮廷と町衆とのかけ橋ともなり、門跡文化というべき独自の文化を育てた。前代を集約する意味で、茶・花・香などの道も、新しく伝流をはじめた。

第二には、元禄期で、新興の町人階級がおこり、彼らの趣味、欲望につながる文化の発展をみるとともに、前期の文化も光琳、乾山などによって裝飾的にうけつがれ、茶・花などにも大衆化がすすみ、とくに上方に大きな文化的昂揚がみられる。第三は化政期で、文化は東漸し、京都は西陣産業とともに衰退するが、そのなかにも

学問、芸術の上に、新しい近代的なものを育て上げる素地が醸成されて行く。

こうして近代へうけつがれて行くなかにも、とくに京都文化として注目されるのは、時代とともに積み重ねられた意匠と、人々の手から手へ伝えられた技術である。この二つはたとえば家元制度といわれる制度としても、その中核をなすものと云えよう。茶室やその荘厳のなかにみるさまざまな意匠、点前や茶器をめぐる十職といわれる技術などには、その意味で京都文化を代表させることもできよう。

### 三 京都文化の内容的特徴

京都文化は、いま考えたような渡来文化・王朝文化・社寺文化・町衆文化そして伝統文化などの、さまざまな文化現象を層序的に内包しつつ、各時代文化の資料的な厚味を自ら保有していたと云ってもよい。

これをさらに美術の範疇についてみると、古代にあっては彫刻という造型が、最も大きな意味をもっていった。日本に仏教が伝わったとき、人々はその教義についてではなく端嚴きんごんといわれた芸術性に最も心を惹かれた。それ以来、王朝を通じ彫刻の時代と考えられた。鎌倉時代はその復興期であった。王朝時代から室町時代にかけては絵画という形態で肖像や仏画などが画かれたし、世俗画も四季・名所につれて多く産出された。まさに絵画の時代であった。それについては室町桃山時代から江戸時代にかけては、工芸が多く制作された。それは生活文化というべきもので、多くは日用品、調度品であ

る。この時代には絵画もまた襖絵・屏風のような生活上の効用性が高く評価されたものである。

このように美術についても、彫刻・絵画・工芸の諸範疇は、それぞれ時代的に継起するところに資料的な重点がある。それは神仏から人間へという、美術の製作目的に大きな潮流を考えさせるものである。やがて個々の作品についても作家の人間への関心を引き起させることにもなって、作家と作家の関係がしだいに明らかになってきた。美術の資料としては、その双方の充実が必要となってくる。しかしそれも個々分散的に研究しても、全く意味がない。そこで個々の作品・作家を、京都文化という時代的文化を内包した系列に關係づけようとする意味は、美術作品が歴史・社会と無關係に存在するのではなく、ひろく他の作品とも關係しあつて、時代の文化なり文化財として存在するからである。従つてそれは単なる時代文化であつても差支えないが、とくに京都文化との関連において云えば、政治的区分による時代区分とは別に、文化現象にひきつけて渡来・王朝・社寺・町衆・伝統などの区分案を示したまでのことである。京都文化の内容をさらに検討することによって、いっそう充実されることがのぞましい。

わたくしはここでも、一個の作品について一方に年代・作家・作風などの微視的検討とともに、一個の作品の文化史的な位置づけを多くの例証によって巨視的に検討する必要があると思う。その場合京都文化自体を総合的に判断して、その核心は何かを考えておく必要があるであらう。いわば京都文化の内容的特徴であるが、これは伝統文化においても述べたように、第一は、技術性。それは渡来文化のにない手たちの才技らしい、職人たちの技術は一貫して優秀で

あった。第二は、意匠性。これは王朝人が体得した自然的環境から  
帰納されるもので、絵画・染織さらに建築空間の感覚にまで及ぶも  
のである。

さらに京都の都市的性格として加えるなら、第三は、宗教性。こ  
れは王城と社寺の町にふさわしく、信仰的行事に囲繞され、そのそ  
れぞれが京都の文化的特徴となっている。第四は、流通性。これは  
中近世都市にみられる商品流通の流れに従って、文化が拡散する点  
であり、国際交流にも及ぶ性格である。第五は、伝統性。これは伝  
統文化からの帰結であるが、これにもとづく創造を見逃してはなら  
ない。以上のように、京都文化はその歴史を重層的にふまえなが  
ら、内容的な特徴を示しつつあるのである。